第1回

里山の性格とその変貌

――史資料に見る山林利用の変遷――

富田　昇

私は今、里山という環境がどのように変容をしてきたか調べています。私のもともとの専門は植物分類学なのですが、それがなぜ里山に興味を持つようになったか、ということからお話ししてみたいと思います。

ネコノメソウという植物をご存じですか。非常にマイナーな植物です。そんなに高い山に生えている植物ではなく、どちらかというと人里に近い沢沿いにある植物です。それを集めて、形態を調べて比較をするという研究をしていました。そのため、ネコノメソウが生えているような里に近い山に入ることが多く、里山といわれる環境は私にとって身近な存在でもありました。

その後、博物館の学芸員として働いた時期がありました。私は植物が専門の学芸員だったのですが、そのほかに民俗学や歴史学が専門の学芸員と触れ合う機会があり、そこでいろいろな刺激を受けました。そのような中で、里山の歴史を調べてみるとおもしろそうだと思うようになって、自分なりにいろいろ調べてみたわけです。

今日は、里山とはどのようなところで、それがどのように変化してきたかということを紹介したいと思います。

古くて新しい「里山」

†里山ブーム

図1の写真を見てください。

図1　岡山県玉野のはげ山（昭和27年）／『緑化促進によるハゲ山の早期復旧』

雪が積もってきれいな山だなと思うかもしれませんが、これは雪ではありません。実は、いわゆる「はげ山」で、木が生えなくなって土砂が流出している状態なのです。なぜ里山の話で、このような無残なはげ山が出てくるのかと思われるかもしれませんが、実は里山と非常に深い関係があるのです。このことは後ほどお話しします。

現在、里山という言葉をテレビや新聞などで見かけることが多いと思います。ＮＨＫの「趣味悠々」という番組で、「里山歩き」がテーマになったこともありますし（図2）、実際に里山といわれる場所に行くと、植物観察をされている方々とよく出会います（図3）。健康ブームや環境への関心などの背景もあり、今、里山がブームになっているといえます。

図2　里山歩きの番組テキスト

図3　里山での植物観察会

私は神奈川県の相模原市に住んでいるのですが、その近所で最近、新聞に大きく載った出来事がありました。それが図4ですが、開発によってもともとあった里山がなくなってしまうことになり、大騒ぎになったという記事です。その見出しに「世界級の里山」と書いてあります。「世界級」とはどんなものなのかよく分かりませんが、実は、その場所には貴重なホシザクラという固有のサクラが生えているのです。いずれにしても、このように記事として大きく新聞に載るほど、里山が注目されていることが分かります。

図4　『朝日新聞』平成20年7月19日

†里山とはどういう場所か

では、いったい里山とはどのような場所なのでしょうか。里山といってみなさんがイメージされるのは、おそらく図5のような景色ではないかと思います。これは三島市の沢地あたりの風景で、奥には箱根の外輪山が見えます。里山

というと、このように田んぼがあって、畑があって、民家があるような緑豊かな環境のことを一般的にイメージされるのではないかと思います。

「里山」という言葉がどのくらい昔から使われていたのか調べてみると、宝暦九年（一七五九）の『木曾御材木方』という古文書の中に出てくるのが最初といわれています。これは長野県木曽地方の林業関係の古文書ですが、「村里家居近き山をさして里山と申候」、つまり、村里に近い山のことを里山と言うと書いてあります。里山とは、山の一つの形態を指しているのです。

図5　三島市の農村風景

このような人里近くの山の呼び方が、日本全国で「サトヤマ」と決まっていたわけではありません。地方によってさまざまな呼び方がされていたことが分かっています。木曽地方では「サトヤマ」でしたし、また東北地方でも「サトヤマ」と呼んでいる地域があるようです。ところが、同じ東北地方でも、福島県の天栄村でお年寄りに伺ったところ、「デドノヤマ」と呼んでいたと教えてくれました。「デド」とは「山から出てきたところ」という意味だそうです。漢字で書くと「出戸」になります。

さらに、村里のそばの山がご飯を盛ったような形をしているから「メシモリヤマ」という呼び方をしている地域もあれば、ただ単に「マエノヤマ」とか、家の裏だから「ウラヤマ」といった地域もあります。もっと単純に「ヤマ」と呼ぶところもあります。「赤とんぼ」という童謡の中に、「山の畑の桑の実を」という歌詞が出てきますが、これはまさにこの「ヤマ」のことを指していると思われます。里に近い山に桑が栽培されていて、その実を摘んだという歌詞です。

つまり、人里近い山の呼び方は、「サトヤマ」と決まっていたわけではなく、たくさんある中の一つの呼び方でしかなかったということです。

一方、「オクヤマ」という言葉が使われることがあります。図6は民俗学でよく使われる図式ですが、同心円の中心に人が住んでいる「サト」があるとすると、その周りを囲んでいるの

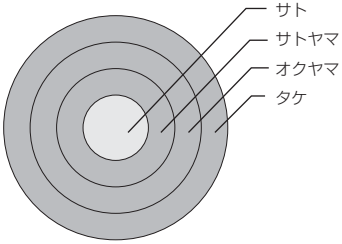

図6　サトとヤマの概念図

がいわゆる「サトヤマ」になります。その外側には「オクヤマ」があり、泊まりがけで山仕事をするような場所のことをいいます。逆に、日帰りで帰って来られるような近い山を指して「サトヤマ」というわけです。この「オクヤマ」は共有地、すなわち入会地（いりあいち）となっている場合が多いようです。

さらにその外側には、「タケ」と呼ばれる山があります。八ヶ岳とか〇〇岳といわれるような山がこれに当たります。「タケ」には、仕事で行くことがありません。遠くから眺めるだけで、神様の住んでいる信仰の対象としての山になります。

つまり、「サト」の周りに「サトヤマ」があり、その外側に「オクヤマ」があり、さらに遠い所に「タケ」があるというわけです。

†里山の意味がひろがる

このように、里山という言葉は、もともと人里近い山の呼び方の一つのタイプでしかなかったわけですが、それが一般化するようになる時期があります。その仕掛け人が、四手井綱英という京都大学の林学の先生です。一九六〇年代前半に、この人が里山を一般的な言葉として使い始めます。

しかしそれも実は、ただ「山里」を逆にしただけだそうです。村里に近い山という意味として誰にでも分かるだろうと考えて、林学でよく用いる農用林（農業のために必要な山の林）を里山と呼ぼう、と提案したのです。

このような提案がなされた一九六〇年代は、いわゆる高度経済成長の時代に当たります。急激な都市化が進行して、郊外地の自然破壊が問題になりつつあった時期です。山林だけではなく、農村の中の田畑や河川だけでなく、集落周辺の農村景観全体が減っていく中で、身近な自然環境の保全が徐々に叫ばれるようになった時期です。このような時期に、里山という言葉が、自然保護のキーワードとして頻繁に使用されるようになってくるのです。

農村は、人が農業をすることで常に自然を改変してきた場所です。このように、人が関わることによって変わってきた自然のことを「二次的自然」といいます。そして、このような自然が残っている場所のことを「里地」といいます。「里地」は、環境省などでもよく使っている言葉で、「二次的自然のある里地が大事だ」という言い方をします。

これまでの里山という言葉は山林という限定された意味でしたが、現在は、林だけではなく、農村景観全体、つまり里地を指すことが一般的になりました。

†発掘された「植生の記録」

次に、里山がいつ生まれたかということを紹介したいと思います。花粉分析という解析の方法があります。これは、遺跡周辺の土の中にどのような植物の花粉が含まれているかということを解析する方法のことです。そうすると、当時その遺跡の周辺に生えていた植物相の概要が分かってきます。

青森県に、三内丸山遺跡という有名な遺跡があります。約六千年前の縄文時代の遺跡といわれていますが、ここでも花粉分析が行われています。遺跡の地層の古い層からは、ブナの花粉がたくさん出ています。この辺りの林は、放っておくとブナの林になるので、当初は原生的な自然があったことが分かります。そして、だんだん時代が新しくなってそこに人が住み始めると、草原性の植物やイネ科の植物、またはクリやナラの木が増えてくることが、花粉分析から分かっています。つまり、まさしく二次的自然が誕生したことを示しているのです。オーバーな言い方になりますが、里山は六千年前からあったといっても間違いではないということです。

†里山は資源採集の場

では、里山がどのような場所だったかというと、資源採集の場でした。私が生まれた時にはすでにガスや石油を使う生活をしていたわけですが、もっと前の世代では、木炭で暖を取ったりする生活をしていた方が多かったのではないかと思います。木炭や薪、粗朶（そだ）、肥料などを使っていました。

「刈敷（かりしき）」という言葉があります。地域によっては、「カッチキ」「カチギ」などという呼び方をするところもありますが、いわゆる緑肥のことです。田んぼによくレンゲソウが咲いていますが、これを畑に直接鋤き込んで肥料にします。これも緑肥の一種です。

刈敷とは、山かに生えている若い枝や草の類を、春に刈ってきて、それをそのまま田んぼや畑に鋤き込んで肥料にすることです。さらに落ち葉などを集めてきて、家畜の糞尿と合わせて堆肥を作ったりもします。

その家畜は、農家にとって非常に有用なもので、耕したり荷物を運んだりする時の動力源となりました。家畜の飼料となる草を秣（まぐさ）といいますが、それも山から採ってきます。明治以降には養蚕が盛んになり、山で桑を育てて桑葉を採ります。

もちろん人間の食料も里山で生産されます。稲を育て、野菜を育て、果樹を育てます。また、日本古来の家屋は、ほとんどが木と草でできていたため、家の建材も里山から

採ることになります。さらには、人間の暮らしに必要なお椀や草履、籠などの日用品も、里山にある資源を使ってきました。

もともとの植生のことを原生的植生といい、三内丸山遺跡ではブナ林でしたし、この沼津のあたりではシイやカシの林になりますが、このような原生的植生で、伐採や落葉かきなどの資源採集をしたり、田畑の造成、植林、火入れなどをして必要な資源の増加を促す管理を行ったりすることによって、二次的自然が形成されます。そして、これが里山と呼ばれている場所なのです。

†二次的自然の維持

では、この二次的自然はどのように維持されているか考えてみます。その前に、「植生遷移」という言葉について触れておきたいと思うのですが、これは植物学の専門用語で、草木のない状態から森林へと変化していく現象のことです。

草木がなく地面がむき出しになっている状態のことを裸地といい、裸地を放っておくとだんだん草が生えてきて草原になります。それを放っておくと、十数年で木が生えてきて、数十年経つと松林や落葉樹林になっていきます。さらに放置すると、このあたりでいえばシイやカシ、ドングリの木が占める暗い常緑樹林になります。これには気候的な制約があり、先ほどの青森の例ではブナ林になるわけです。このような状態を、専門用語で「極相（きょくそう）」といいます。

したがって、放っておくと常緑樹林になってしまうのですが、実際にはほとんど常緑樹林にはなりませんでした。なぜそうなったのか、図7で説明します。

植生が変化していく途中の段階で、草原があります。草原には、人間の生活にとって大きな価値があります。刈敷や屋根葺きなどのためには草が必要だからです。また、その次の段階の雑木林も非常に重要です。炭を焼き、松林からは建材を採ります。

このような資源を利用するために、草原であれば刈り取ったり野焼きをします。雑木林の場合は伐採を行います。そうすることによって、田畑ができたり茅場ができたり、あるいは炭や薪を作るための薪炭林（しんたんりん）（雑木林）が形成されたりします。これが二次的自然なのです。

つまり、資源を利用することで、植生遷移を停止させるわけです。草原を草原のままにしておくため

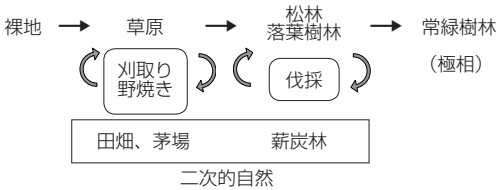

図7　植生遷移と二次的自然の維持

に野焼きをしたり刈り取ったりして木を生えさせない。雑木林のままにしておくために木を伐採して、常緑樹林にならないようにする。その状態で停止させることによって、二次的自然が維持されていたのです。

†里山の生物多様性

里山のもう一つの面として最近注目されているのが、生物多様性です。生物多様性とは、その場所にどれだけ多様な生物がいるかということを表す言葉です。

里山は、人間が手をかけている場所なので、多様な二次的自然環境ができあがっています。思いつくまま列挙してみると、水田、畑、ため池、水路、薪炭林、松林、草地、はげ山などがあり、非常に多様です。しかもそれがモザイク状に分布しているということが特徴です。このことを「攪乱された状態」といいますが、このような場所に適応した生物が生活の場とするため、多様な環境に多様な生き物がいるということになります。

富士北麓の草原の消失

これまで、里山とはどのような場所なのか紹介してきましたが、次に、里山がかつてどのような姿だったのかということを、実際に資料を用いて紹介していきたいと思います。

その前に説明しておかなければならない言葉があります。それは「植生景観」というものですが、読んで字のごとく「植生によってかたちづくられる景観」のことです。当たり前のことですが、木が生えていたらそこには林の景観が見られます。このように、生えている植物によって決まってくる景観全体のことを植生景観と呼んでいます。

†絵図に見る江戸時代の富士北麓

富士山の裾野には広大な草原があります。大野原などと呼ばれていて、現在は自衛隊の演習地になっています。自衛隊の演習地だから草原なのかというと、そうではなく、実は逆です。昔から草原だったところを自衛隊が演習地として使ったために、草原のまま残ったということが分かっています。なぜ草原になったかということですが、ここは多くの富士山麓の村々の入会地で、薪や茅を採集する場所だったからです。そこが現在は自衛隊の演習地として残されているのです。

ですから、大野原の場合、自衛隊の演習地だから草原が残ったわけで、実は草原がもっとあったのではないかと私は推測しました。そして、富士山の周辺をいろいろ調べて

いたら、富士山の北麓にあたる富士吉田の絵図が出てきました（図8）。「富士山北口本宮富士嶽神社境内全図」という、明治25年に作られた絵図ですが、一目見て私は違和感を覚えました。中央には木で覆われた浅間神社が大きく描かれています。これが主役です。しかし、この主役の背後に私は目を引かれました。何となく白っぽい場所が広がっていて、これは草原ではないのかと想像したのです。

一度知り合いに見てもらった時に、「この辺は草原じゃないか」と尋ねたら、「これはただ単に忘けて何も書いてないだけなんじゃないの」と言われて、非常に悔しい思いをしました。しかし、何が何でもここが草原だったという証拠を得ようと、いろいろ手を尽くして調べてみたところ、「新屋村絵図」（文化年間）という絵図が出てきました（図9）。

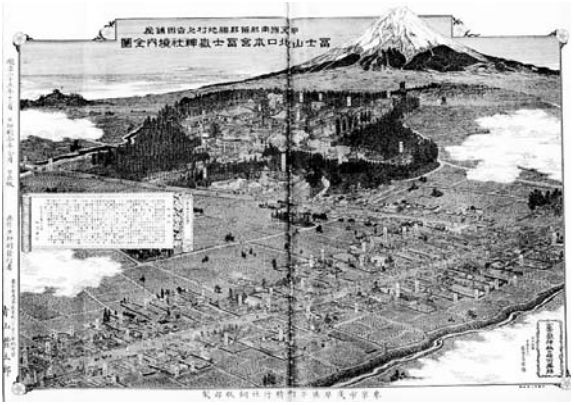

図8 「富士山北口本宮富士嶽神社境内全図」（明治25年）

この絵図は、浅間神社の位置関係を考えると、先ほどの絵図と同じ角度から富士山を眺めていることが分かります。この村絵図の中に「切替畑」という文字があります。「切替畑」とは焼畑のことです。つまり、木を生やしては焼いて畑にし、しばらく耕作した後にまた木を生やして、何年か経ったら焼いて畑にする。つまり、定期的に切り替えていたから「切替畑」といわれるのです。

一方、先ほどの白っぽい場所に対応する場所には、「秣場」と書いてあります。秣場とは草原のことを指すので、つまり、

図9 「新屋村絵図」（文化年間）

草地が帯状に描かれていることが分かったのです。

†「草山三里」と「躑躅ヶ原」

さらに調べてみたところ、『富士山の自然界』という大正一四年に出された本が出てきました。この中に、「草山三里」「躑躅ヶ原」という記述がありました。次のように書かれています。

この草山は古来草山三里といい、一合め以上の森林帯などと並び称さるるほどに、草本植物が千紫万紅互いにその艶を争うことで、蜂蝶の楽天地である。

三里は、今の距離でいえば一二キロメートルほどですが、一二キロメートルにわたって草原が広がっていたというのです。さらに、次のように書いてあります。

大石茶屋の付近において六月中旬満開のレンゲツツジの大群落は目の届く限り赤毛氈をしきつめたるごとく、恐らくあまり天下に例がなかろう。

つまり、レンゲツツジの大群落もあると、同時に書いてあるのです。確かに草原が存在し、さらにレンゲツツジの群落もあったわけです。そのレンゲツツジの群落の写真も出てきました（図10）。この写真は、『ふるさとの思い出写真集　富士吉田』という本に載っていたのですが、そのキャプションには次のように書いてあります。

惜しむべし、この花の群落が、敗戦の後、日本人の魔手か、はた異邦人の泥足か、ぬきとられ、ふみにじられて、今はその姿をみない。

このツツジの群落はなくなってしまったというのです。それが日本人や外国人のせいにされているのがよく分からないのですが、なぜなくなってしまったのかを確かめに、

図10　躑躅が原／『ふるさとの思い出写真集　富士吉田』

図11　現在の草山三里（平成20年）

実際に現地に行ってみました。

現在は、図11のような状態です。これが草山三里の現状です。草山ではなくなって、森林になっています。先ほどの引用文で出てきた大石茶屋も見つけたのですが、廃屋になっていました（図12）。大石茶屋の向かいには今もツツジが生えていますが（図13）、いかにも貧相な感じになってしまっています。つまり、草原はなくなっているし、ツツジも細々と残っている程度になってしまっているのです。ちなみに、図13の左下に映っている石碑には、「天然記念物躑躅ヶ原」と書いてあります。

ツツジは、日が当たる場所でないとなかなか育たない植物です。いまは草山三里が森になってしまった、つまり草原が森林化したことで、ツツジも減少してしまったのではないかと思います。先ほどの写真集のキャプションには、人が抜きとってしまったからと書いてありましたが、レンゲツツジは普通にお花屋さんなどで売っているものですから、それほど貴重なものでもないので、たくさん抜き取る必要性もありません。実際行ってみたところ、周りは森林化してツツジが生えられるような場所がほとんどないことから、やはりそれが原因なのではないかと思います。

図12　大石茶屋跡（平成20年）

図13　現在の躑躅ヶ原（平成20年）

伊豆半島の植生景観変遷

†低植生地が多かった伊豆半島

次に、ここ沼津に近い場所ということで、伊豆半島について紹介していきたいと思います。ここでポイントとなるのが、「低植生地」という言葉です。これは読んで字のごとく、植生が低い、つまり木が刈られていて大木がない状態のことを指します。

この点について、京都精華大学の小椋純一先生がおもしろい研究をされています。明治初期に、この地域で地形図が作られているのですが、その地形図は、現在よりも植生について細かく分類がされていて、昔がどのような植生だったかということを調べるのにいいデータとなっています。

また、その地形図を作る時に、現地に行って見たり聞いたりしたことを記録した「偵察録」というものを作っていたそうです。小椋先生は、その地形図と偵察録から、伊豆や箱根の地域の植生景観を推定されたのです。その結果が図14です。

図の中の黒っぽい色の部分が、低植生地の特に多いところです。薄い灰色の部分も低植生地の多いところ。網がかかっているところは森林が多いところです。そのように見てみると、伊豆半島がほとんどが黒っぽい部分で占められていることが分かります。なお、伊豆半島の中央部には森林の多い場所がありますが、ここは天城山です。したがって、天城山系を除くと、ほとんどの場所が低植生地に占められていたことが、小椋先生の研究で明らかとなりました。

とはいえ、低植生地がどんなところなのかなかなかイメージしにくいと思いますので、実際に現地に行って過去の写真と比較することによって、具体的に見ていきたいと思います。

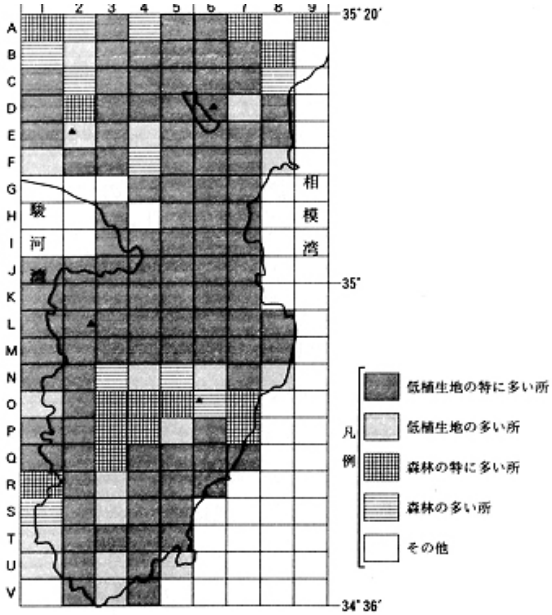

図14　明治初期の伊豆の植生景観／『植生からよむ日本人のくらし』

†香貫山（沼津市）

まず、香貫山（かぬき）です。沼津港からよく見える小高い丘で、ハイキングコースにもなっています。図15は、香貫山の現

図15　沼津市香貫山（平成20年）

図16　香貫山（昭和10年頃）／『レンズに写った沼津』

図17　沼津市戸田（平成20年）

図18　戸田（昭和40年頃）／『写真風土誌　伊豆』

在の姿です。全体が森に覆われているようすが分かります。そして、図16が、同じ場所の昭和一〇年ころの写真です。手前に家がないのは当然ですが、山を見ると非常にすかすかとしていて、稜線がくっきりと分かります。

現在の写真と比べると、その差が際立って分かると思うのですが、特に昔の写真には山頂付近にほとんど木がありません。黒っぽくまとまって見えるのは松の木です。この松も、人家の大きさと比べてみると、そんなに大きな木ではないことが分かります。つまり、昔はこれだけ木が少なかったということです。これが低植生地という状態です。

†戸田（沼津市）

図17は、今は沼津市に含まれている旧戸田村の漁港の写真です。先ほどの香貫山と同じように、現在は緑豊かな森林で覆われている状態です。

同じ場所の昭和四〇年代の写真が図18です。一目で分かるとおり、やはり木が非常に少ない。点々と生えてはいますが、ほとんどが藪のような状態で、稜線が非常にくっきりと識別できます。しかし現在は稜線が明瞭ではありません。

†土肥（伊豆市）

図19は、さらに南に行って、伊豆市の土肥の写真です。ミカン畑の中から撮っているのですが、非常に緑豊かな植生景観になっています。この同じ場所の昭和二五年ころの写真が図20です。これも同じように比較してみると、手前のミカン畑はほとんど変化がないのですが、奥に見える山は、昭和二五年ごろはすかすかし

図19　伊豆市土肥（平成20年）

た植生であったということが分かります。

図20の撮影時期は、おそらく春です。というのは、竹が黄色く見えるからです。春は「竹の秋」などとよく言われるように、竹は秋ではなく春に黄色くなるのです。現在の写真の撮影時期は夏ですから、季節としてもそんなに変わりません。

ただ、現在の写真を見ると、山の中腹の斜面がほとんど竹で覆いつくされています。これは全国的に問題になっているのですが、竹は人の手で管理しないと際限なく増え続けるなかなか厄介な植物です。この山全体が竹林になりつつあるといった状態が見えます。つまり、昭和二五年ころには小さかった竹の群落が、今ではこんなに広がってしまっている。昔はすかすかとした開けた植生だったものが、今は、竹が茂ったり、クヌギやコナラといった落葉樹が大木になっているという状況になっています。

図20　土肥（昭和25年）／『目でみる西伊豆の歴史』

図21　松崎町松崎港（平成20年）

図22　松崎港（昭和30年頃）／『静岡県』岩波写真文庫新風土記24

†松崎（松崎町）

さらに南に行き、図21は松崎町の港の写真です。非常にのどかな場所なのですが、図22が同じ場所の昭和三〇年代の写真です。山を比較してみると、昔の写真には高い木が点々としかなく、やはり稜線が非常にくっきりとしています。現在では稜線がモコモコしている。これは木が生えているからです。右側の切り立っていた稜線も、現在は丸みを帯びていることが分かります。これだけ木が増えているのです。

†伊浜（南伊豆町）

さらに南には、伊浜という集落があります。その昭和四〇年ころの写真が図23です。昔の写真では、山の斜面に縞模様が見えるのが特徴的ですが、これはすべて段々畑です。山の上の方までずっと畑が張りめぐらされているのが分かります。四五度ぐらいはありそうな斜面ですが、ここにも石垣を組んで畑を作っていたのです。同じ場所の現在の写真を見ると（図24）、畑は完全に森に飲み込まれているという状態になっています。この林の中に入ると、おそらく昔の石垣の跡が出てくると思うのですが、現在は畑がだいぶ少なくなって、木に覆われてきているようすが分かります。

図23　南伊豆町伊浜（平成20年）

図24　伊浜（昭和40年頃）／『写真風土誌　伊豆』

また特徴的なのが、背後にある変わった形の山です。昔の写真でも、手前の山にはぽつぽつと松のような木が見えるのですが、背後の山にはほとんど木がありません。つまり、ここは草原になっていたのではないかと思われます。しかし現在は、やはり稜線がぽこぽこしています。霞がかかっていて詳しいようすまでは確認できなかったのですが、稜線がぽこぽこしているということは、木が生えている。つまり、昭和四〇年代には草原だったところが、現在森になりつつあるということが分かります。

†池（伊東市）

次は、伊東市の池という場所です。昔は池村という村でしたが、なぜ池という地名かというと、ため池があったからです。現在の写真を見ると広い田んぼが中央にありますが（図25）、明治末の写真を見ると（図26）、池があったことが分かります。その池を干拓して田んぼにしたわけです。このような工事が行われると、よく記録写真が残されます。昔は写真は非常に高価ですから、人を撮ったりすることはあっても、山が写される機会はなかなかないのです。しかし、工事が行われた関係で、明治の末に写真が撮られています。

池が田んぼになったことも、もちろん非常に大きな変化

図25　伊東市池（平成20年）

図26　池（明治末）／『目でみる伊東市の歴史』

ですが、注目すべきは山林の方です。現在と比較すると、当時はやはり木が少ないことが分かります。池の手前にぽつぽつと立っているのは、おそらく針葉樹で、スギかマツかヒノキあたりだと思うのですが、あとは藪のような状態です。現在はほとんど森に覆われているわけですが、別荘地らしきものがあるのが見えます。この家の高さをそのまま昔の写真に持ってくると、いかに植生が低かったかということが分かります。また、現在は竹藪が広がっていることも分かります。さらに、昔の写真の奥の山を見てみると、稜線がくっきりと分かります。つまり、高い木があまりなく、地肌がよく見えていたことが分かります。現在は、もっぱら木に覆われていて、スギかヒノキの針葉樹の植林になっています。

今度は、この池を反対側から眺めてみました（図27）。先ほど撮った写真は大室山の山頂から写しています。ですから、反対側から撮ると、大室山がよく見えます。矢筈山という山に往復三時間かけて登ってやっと撮った写真です。大室山といえば草山で有名ですが、現在の写真では周りが森で、大室山だけ草山として孤立しているように見えます。非常に特徴的な形でもあり、植生も特徴的です。

しかし、昭和四〇年代の写真を見ると、周辺の山にも木があまり見られません（図28）。黒っぽく見えるところに針葉樹が生えているだけで、その他は非常に植生が低いことが推定されます。現在の大室山は、草山として周りから異

図27　池と大室山（平成20年）

図28　池と大室山（昭和40年頃）／『写真風土誌 伊豆』

図29　伊東市伊東港（平成20年）

図30　伊東港（明治43年）

質な存在として見えますが、かつては山の形が特徴的なことを除くと、そんなに特異な植生ではなかったことが分かります。つまり、大室山と同じような植生が、周りにも点在していたわけです。それが現在は、大室山だけに残されているのです。

†伊東（伊東市）

図29は、現在の伊東の漁港から市街地を写した写真です。この背後の山に注目すると、色の薄い部分は竹藪ですが、全体的にはやはり森が広がっているように見えます。図30は、同じ場所の明治四三年の絵はがきです。「いるか大漁の景」と書いてあります。

この山を比較してみると、惨憺たるありさまです。木が一本一本分かるぐらい立体的に写っていますが、つまり周りの植生がそれだけ低いわけです。稜線もはっきり見えます。

†仁科大滝（西伊豆町）

これまで見てきたのは、うまく比較ができた写真ですが、実際に行ってみると比較できない場合の方が多く、実はそのようなところに苦労があるわけです。次は西伊豆町の仁科大滝の写真です（図31）。昭和三七年の写真を目印にして、

図31　仁科大滝入口（昭和37年）／『目で見る西伊豆の歴史』

図32　仁科大滝入口（平成20年）

同じ場所に行ってみましたが、今は何も見えません（図32）。看板だけは同じ位置に立っているのですが、比較ができなかったという例です。

†一碧湖（伊東市）

次の写真は、有名な一碧湖です（図33）。これも、昭和三〇年代の写真と同じように、大室山が写る角度から撮りたかったのですが、手前の林が茂ってしまって全然景色が見えない。仕方ないので、少し上に上がって、違うアングルから撮ってみたのが図34です。やはり昔の方が植生が低かったことが分かります。

図33　伊東市一碧湖（昭和30年頃）／『静岡県』岩波写真文庫新風土記24

図34　一碧湖（平成20年）

†なぜ伊豆には低植生地が多かったのか

さて、先ほど天城山系に森林が残っていたことを申し上げましたが、それは、伊豆半島の中央部に江戸時代には御料林、つまり皇室の所有の林があったからです。一般庶民が入れる場所ではなく、入ってもし何か採ったりしたら厳罰に処されます。そのような管理をしていた林が、伊豆半島の中央部に存在していたことが分かっています。

これによってどのようなことが起きるのか。冒頭で、里山の外側に「オクヤマ」と呼ばれる領域があると申し上げましたが、伊豆半島にはもともと半島という地形的な制約に加えて、真ん中に御料林、つまり立ち入り禁止の林があったために、里山に対する「オクヤマ」が存在しなかったのです。したがって、資源採集に使うための数少ない山林を、効率よく利用する必要が出てきます。

そのために伊豆半島では、焼畑が非常に頻繁に行われていたことが分かっています。段々畑の写真もありましたが、あのようなところもおそらく焼畑を行って切り開いたと思われます。それが慢性的な低植生化を招いたではないかと推測しています。正確に断言できるほど資料は集まっていないのですが、おそらくこのことが低植生化に関わっていたのではないかと思っています。

箱根周辺の植生景観変遷

†村絵図に見る植生景観

次に、箱根周辺に場所を変えてまた見ていきたいと思います。図35は『岩波村絵図』です。年不詳ですが、おそらく江戸時代です。岩波村は今の裾野市に当たり、有名な箱根用水が通っている旧深良村は隣村でした。絵図の上の方が箱根の外輪山です。

山の部分は灰色で塗られています。この絵図には凡例が付いていて、灰色部分は「芝地」と書いてあります。つまり、草が生えているのです。一方、凡例で、緑色部分が「木色」と書いてありますが、絵図には緑色で塗られている場所はありません。木が生えているところは、本当に木が描き込まれているのです。つまり、描けるぐらいの木しか生えてなかったのではないか。山林は「芝地」で塗られ、松が点々と描かれているのが、この絵図の特徴です。

図35 「岩波村絵図」 年不詳

†箱根用水（裾野市）

図36は有名な箱根用水で、裾野市側の水が出てくるところです。現在は非常に厳重なバリケードがされていて、写真を撮るのに非常に苦労をしたのですが、片足が浮いているような状態で何とか写したのがこの写真です。現在はスギかヒノキのような針葉樹の植林地となっていて、後ろがどうなっているか何も見えません。ところが昭和30年代の

図36 箱根用水出水口（平成20年）

図37 箱根用水出水口（昭和30年頃）／『静岡県』岩波写真文庫新風土記24

写真を見ると（図37）、谷があることが分かります。また、山は藪のようになっていて、その中には松が生えているのが見えます。

†足柄峠（裾野市）

次の写真は足柄峠です（図38）。ここには何某かが座って笛を吹いたという「吹笛の石」が鎮座しています。同じ場所を大正末に撮った写真がありますが（図39）、この植生景観は先ほど見た江戸時代の絵図のようすに似ているようにも思えます。大正末も江戸時代も、農村の生活はそんなに変化がなかったはずですので、私はおそらくほぼ同じような植生景観を呈していたと考えています。つまり、絵図を描いた時には、山がまさしくこのような状態だったのではないかということです。

これを現在の姿と比較しました。「吹笛の石」の場所からだと見通しがきかないので、少し高台に登って撮ったのですが、現在は非常に大きな針葉樹が茂っている状態です。

図38　足柄峠　吹笛の石（平成20年）

図39　吹笛の石（大正末）／『写真集　御殿場・裾野いまむかし』

戦争、大規模公共事業の影響——福島県天栄村

次に、伊豆・箱根から少し離れて、福島県の状況を見ていきたいと思います。戦争や大規模公共事業が周囲の植生景観に非常に大きな影響を与えたという例です。

†天栄村をめぐる社会的背景

福島県南部の白河市のそばにある天栄村に、羽鳥湖という湖があります。これは羽鳥ダムのダム湖です。天栄村は非常にのどかな山村ですが、歴史を見てみると非常に変わった経緯を持った村です。まず、明治から昭和初期にかけて旧陸軍軍馬補充部が設置されていました。明治三八年に白河支部羽鳥出張所が設置され、軍馬の育成を目的に、広大な敷地が接収されました。図40の太い点線と実線で囲

まれた範囲が、軍馬を育てる牧場として接収されたわけです。

図40は現在の地図と重ねてあるので、ゴルフ場が二つ入っているのが分かりますが、それだけ広大な面積が軍馬の牧場として管理されていたのです。

また、戦後すぐに羽鳥ダムの建設が始まります。昭和二二年に羽鳥集落の離村が開始され、昭和三一年に羽鳥ダムが完成しています。

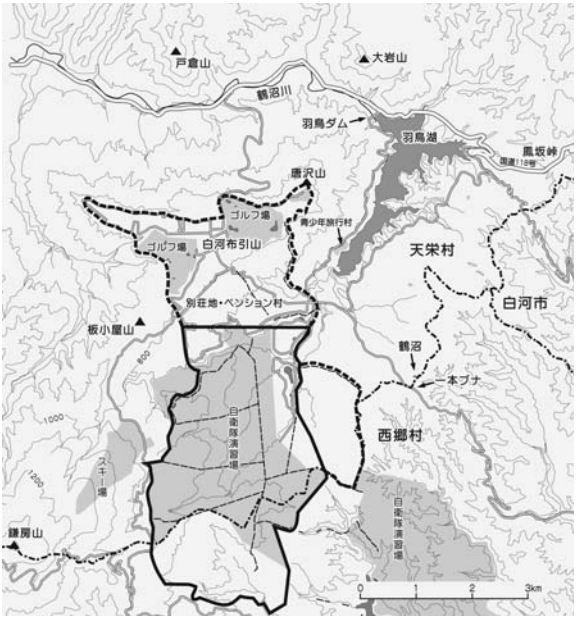

図40　旧陸軍軍馬補充部羽鳥出張所の推定範囲

戦争や公共事業に関連すると、写真が残されることが多いので、その過去の写真と現在とを比較する作業をしてみました。

†軍馬補充部写真に見る植生景観

まず、軍馬補充部の写真です。陸軍関係の資料は、戦後すぐに焼却処分されることが多く、これはわずかに残った写真なのですが、いくつも貴重な写真が残っていました。

図41は放牧地の写真ですが、ほとんど草原になっています。黒い点々は松です。そんなに丈が高くなく、低い植生が広がっているようすが分かります。現在の写真を見ると、まったく見通しがきかなくなっています（図42）。ミズナラ

図41　放牧のようす／西郷村歴史民俗資料館所蔵

図42　放牧地跡と土塁（平成19年）

やアカマツが茂る林になっています。現在の写真の中で、土が盛られている部分があるかと思いますが、これは土塁といい、家畜が仕切りから逃げないように土を盛ったものです。その跡がまだ残っています。これも戦争遺構の一種だと考えられます。

図43も放牧地のようすですが、同じように非常に開けた草原的な景観になっています。これは戦争によって生み出されたという意味では、非常にきな臭いわけですが、逆に牧歌的な景観でもありました。同じ場所に現在行っても、見通しのきかない林になっています（図44）。

図43　放牧場／西郷村歴史民俗資料館所蔵

図44　放牧場跡（平成19年）

†羽鳥ダム管理所所蔵写真に見る植生景観

次に、羽鳥ダムに関連する写真を紹介します。羽鳥ダムの管理所にお邪魔したらいろいろ貴重な写真を見せていただきました。

図45は昭和二四年の羽鳥集落の写真です。羽鳥集落の離村が開始されたのが昭和二二年ですから、二年後のことです。まだ多くの方が住んでいることが分かります。ここで注目したいのは、背後の山です。木がほとんどないのです。小さい木がぽつぽつとは生えていますが、ほとんどの場所では木がない状態になっています。実際に同じ雪の時期に、同じ場所に行って写真を撮ったのが、図46です。

図45　羽鳥集落全景（昭和24年）／羽鳥ダム管理所所蔵

図46　羽鳥湖周辺の山林（平成20年）

図47　鎌房山麓からのぞむ羽鳥湖（昭和37年）／羽鳥ダム管理所所蔵

図48　図47と同地点の現在のようす（平成20年）

山が木に覆われていて、木々でベールが張られたような状態になっているようすが分かります。

では、なぜ当時、こんなに植生が低かったのか。地元のお年寄りに伺ったところ、非常に明快な答えが返ってきました。離村をするので、もともと持っていた山の木をすべて木炭として売却して換金したというのです。山林は普段は少しずつ使っていくものです。しかしこの時は、離村するタイミングでしたから、切ってとにかく換金し、それで村を離れていったとおっしゃっていました。その影響が残っていて、草原的な景観が見られたわけです。

図47は昭和三七年の写真ですが、ここはちょうど軍馬の牧場があった場所で、この当時はすでに自衛隊の演習林になっていたのですが、まだ牧場だった時代のようすを留めている写真です。しかし現在行ってみると、手前にカラマツが植林されてしまって、まったく見通しがききません（図48）。

図49は昭和三七年の写真です。非常に滑らかな植生があるところが、昔の牧場の跡です。写真の下の方に縞模様のようなものが何となく見えますが、これは植林です。昭和三〇年代、四〇年代は、全国で植林が大々的に行われた時期でもあります。現在の写真では、アカマツやカラマツの植林に視界をさえぎられます（図50）。黒い点線は、図49の山の稜線を示していて、白い点線は林道を示しています。

図49　鎌房山をのぞむ（昭和37年）／羽鳥ダム管理所所蔵

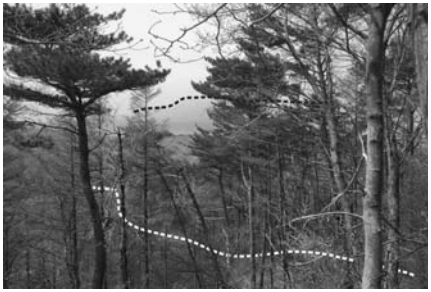
図50　図49と同地点の現在のようす（平成20年）

図51の写真では、草原的な植生が広がっていて沼がよく見えます。しかし現在では沼がまったく見えません（図52）。ミズナラやアカマツの林になっています。

図53は、昭和三七年ごろの「一本ブナ」といわれる目印のブナの写真です。その後、道路の拡幅工事の時に削りすぎて、残念ながら枯れてしまったらしいのですが、現在行くと、「一本ブナ」に匹敵するような大きな木で周りが覆い尽くされています（図54）。

図51　鶴沼（昭和30年頃）／『西郷村史』

図52　図51と同地点の現在のようす（平成20年）

†羽鳥湖周辺の植生景観の変遷

このような羽鳥湖周辺の植生景観の変遷から、どのようなことがいえるのでしょうか。戦争の影響で広大な草原が生み出され、さらに、ダム建設に伴って周囲の山林が大規模に皆伐されました。つまり、里山は、その社会的背景によって容易に姿を変える存在であるということがいえるのではないかと思います。

松林、草原、はげ山——西日本の里山

次に、西日本の里山がどのような状態だったのかという

図53　一本ブナ（昭和37年）／羽鳥ダム管理所所蔵

図54　図53と同地点の現在のようす（平成20年）

ことも紹介していきたいと思います。

†木材の枯渇

東大寺の建物を建てるときに、その木材をどこから調達したかを調べた方がいます。図55がその結果ですが、まず建立された奈良時代には、奈良盆地から採ってきたのではなく、伊賀や近江からです。なぜ奈良盆地から採らなかったのかというと、奈良ではすでに大きな木がなくなっていたために、遠くまで行かなければならなかったようなので

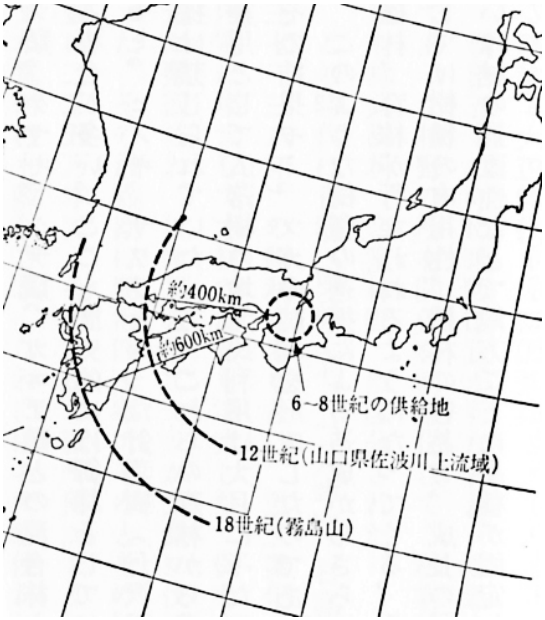

図55　東大寺の木材調達地／『日本の植生』

す。つぎに、東大寺は鎌倉時代に再建されますが、この時には山口県から木を調達しています。さらに江戸時代の元禄になると、今度は九州の霧島山から採ってきています。

このことは、お寺を建てるのに必要な大径木の調達が時代を追って困難になってきたことを示しています。奈良盆地の周辺は、今行くと林で覆われていますが、木材が不足している状態があったということです。

†京都周辺にはげ山、松山、ツツジ山

次に、京都周辺も見てみます。伊豆の植生景観を調べられた小椋先生が、京都周辺の明治時代の植生についても調べて、図56のような図を作成しています。

凡例の「雑草地」というのは、いわゆる草原です。また「矮性雑木地」とは「矮性」が小さいという意味ですので、雑木林のように大きな木ではなく、小さな木がたくさん生えている藪のような状態のことを示しています。大部分を占めているのが松林です。この松林の中にはツツジが多く生育していたことも分かっています。ですから、高木の森林がほとんどなかったことが分かります。

これはまさしく日本庭園の景観ではないかと思います。一般に日本庭園として想像するのは、川があって岩がごつごつとあって、芝が生えていて松が生えていてツツジが生

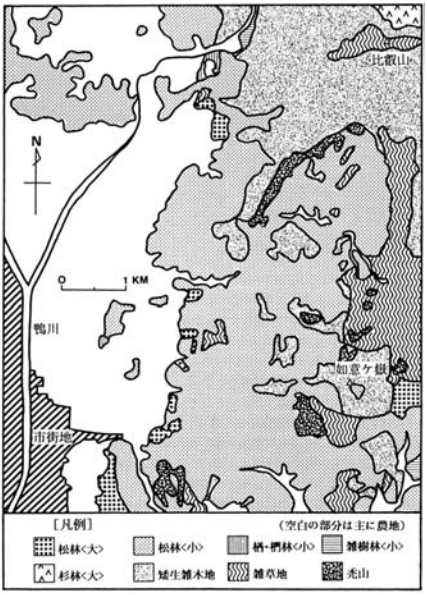

図56　明治中期における京都北東部山地の植生図／『植生からよむ日本人のくらし』

えている状態だと思いますが、かつての京都周辺の植生景観は、まさしくその状態です。ですから、日本庭園の景観は、実は京都周辺で普通に見られたような非常に身近なものだったのではないかと思います。

京都では、庭園の外の風景まで含めてしまうという借景庭園が有名ですね。その借景庭園が、すでに破綻していると指摘する研究者がいます。というのも、昔は借景となる背後の山は、日本庭園と似たような植生景観でした。たとえば、日本庭園の中でツツジが咲けば、背後の山にもツツジが咲くわけです。しかし、今の京都の山では、松やツツジが非常に少なくなっています。木を切らなくなったために植生遷移が進み、季節の移ろいが見られないような非常に暗い林になっているからです。

また、京都周辺の山林の姿を写真で見ると、昔ははげ山が多かったことが確認できます。図57は滋賀県の北部ですが、白っぽく見えるのは雪ではなくはげ山です。地面が露出して、雨で流亡している状態です。

図58は昭和七年ごろの比叡山の写真です。比叡山というと鬱蒼としたイメージがありますが、とても見晴らしのいい景観になっています。しかし、考えてみたら当然のことです。比叡山延暦寺は、かつては武装していました。山城の見晴らしが悪かったら、戦いはできません。つまり、城を造るには見晴らしがいい所でなければならない。だから、たとえば現在の城跡で周りが森に囲まれているようなところがあったら、その景観は昔とはだいぶ違うと考えていいと思います。

図57　滋賀県北部のはげ山（昭和30年頃）／『滋賀県』岩波写真文庫新風土記27

図58　比叡山ケーブル（昭和初期）／『鉄道古写真』

ともかく、昔の比叡山は非常に開けた植生景観であり、先ほどの小椋先生のデータでもこのあたりは矮性雑木地になっていて、それとも符合します。

図59の写真には、アーチ状の橋脚が見えますが、この上には鉄道も道路も走っていません。なんとここには川が流れています。手前にも川がありますが、上にも川があるのです。用水路ではありません。これは天井川といい、はげ山ができたせいで雨が降るたびに土砂が積もってしまい、周りよりも川の方が高くなってしまうという現象があります。車道を造る時に、この川を乗り越えるのが大変だからという理由でトンネルを掘ってしまったというおもしろい光景です。これは、昭和三〇年代の滋賀県の写真です。

†たたら製鉄と製塩

図60は、広島の航空写真です。この三角州がなぜできたかというと、山林の利用の名残であるといわれています。中国山地では、「たたら」という製鉄法が盛んに行われていました。これは、土壌に含まれる砂鉄を溶かして鉄を鋳造するという方法です。そのため、多くの燃料を使いますし、土壌に含まれる砂も取りますから、土砂の流亡を伴います。その結果、

図59　天井川（昭和30年頃）／『滋賀県』岩波写真文庫新風土記27

図60　太田川デルタ

山から土砂が流れてきて、このようなきれいなデルタができたといわれています。たたら製鉄は江戸時代に盛んだったので、おそらく江戸時代以降にこのような形になったのではないかと思います。

中国地方は、たたら製鉄に加えて、製塩もやっていました。日本では、岩塩がほとんど産出しないので、塩はひたすら海水から取っていて、特に若狭湾や瀬戸内海で盛んでした。海水を煮詰めるための燃料として、松葉を利用します。そのため、塩の産地では慢性的な薪不足でした。

このようなたたら製鉄や製塩といった産業の影響で、多くのはげ山が出現していったといわれています。

その名残が、図61の写真で見られます。これは昭和三〇年代の写真です。また、図62の写真、これは一番はじめにお見せした写真ですが、これを見ると、雪が積もっているようにも思われますが、実ははげ山です。昭和二〇年代の岡山県玉野市のようすです。ペンで山に縁取りが描かれていますが、この写真は緑化実験のための論文に載っていたものです。はげ山を何とかしなければいけないという論文が書かれるほど、ひどい状態になっていたことが分かります。

図61　庵治湾（昭和30年頃）／『香川県』岩波写真文庫新風土記39

†製陶

さらに、製陶、つまり焼き物の影響もありました。製陶のためには木を切って燃料を消費します。さらにたたら製鉄と同じように、焼き物も粘土を採るために採掘しなければいけない。そのために、土砂流亡を伴った爪痕が見られます。図63は、昭和三〇年代の岐阜県土岐市の写真ですが、やはりはげ山が見えます。図64は土岐周辺のはげ山の分布を示した図ですが、黒い部分がはげ山です。

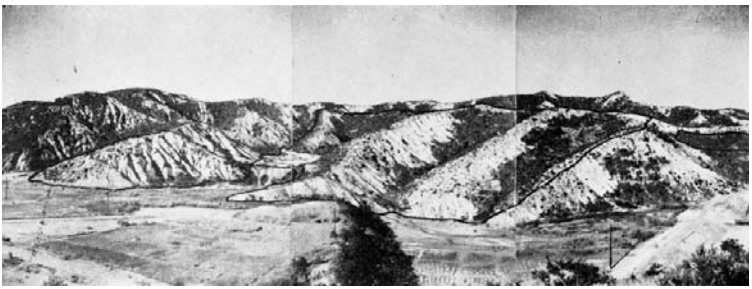
図62　岡山県玉野のはげ山（昭和27年）／『緑化促進によるハゲ山の早期復旧』

図63　土岐市（昭和30年頃）／『岐阜県』岩波写真文庫新風土記23

図64　多治見、土岐周辺のはげ山／『はげ山の研究』

†木が少なく、開けていた里山の植生景観

これまで見てきたように、いずれも木が少なく、開けた植生景観だったといえると思います。その内訳として、草原や松が多く、場所によってははげ山化していました。特に西日本では、このような傾向が強かったわけですが、その地域の産業（製鉄、製塩、製陶など）や社会的背景（戦争、ダム建設など）によって、大きく姿を変える存在であったことが分かります。

里山は緑豊かな場所だったか

†荒廃していた里山

日本は国土の七〇％が森林です。この数字は世界的に見ても稀です。日本はそれほど森林が豊かな国なのです。その理由は、温暖湿潤で、森林が発達しやすい環境であるからです。ですから、日本では土地を放置するとそのうち森林になってしまいます。

では、なぜそのような緑豊かな日本なのに、里山には樹木が少なかったのでしょうか。それは、樹木や草本をはじめ、さらには落ち葉なども資源として利用されていたからです。その結果、里山には大きな木が少なく、開けた植生景観となっていました。さらに、木が少ないだけではなく、荒廃している里山という姿も浮き彫りになってきます。

このことを裏づけるのが、「山論」と呼ばれる古文書の存在です。山論とは、山林資源の利用や地境を争ったという記録のことです。先ほどから紹介していた絵図も、だいたいはこの山論とセットになっています。ここからここまではうちの土地だから入ってくるな、資源を取るな、というような書き方をします。なぜ争ったかというと、それだけ資源が枯渇し、慢性的に不足していたからです。山論は特に江戸時代以降に、各地で急増することが知られています

から、この頃には山林の資源が常に枯渇ぎみであったことが分かります。

明治時代には、本多静六という林学者が、「赤松亡国論」を唱えます。その中で、日本の林地にはアカマツの侵入が著しい、アカマツは土地がやせると増える、だからアカマツ林の増加は亡国の兆しである、と述べています。アカマツはやせた土地に生えるので、土地が林になって豊かになるとアカマツは減ってしまいます。現在は、松枯れ病の影響で非常に減ってきていますが、明治時代の日本の山にはアカマツが非常に多かった。つまり非常に土地がやせていたわけです。それほど逼迫した状態であったことが分かります。

さらに戦後になって、千葉徳爾という民俗学者が、『はげ山の研究』（昭和三一年）という本を著します。これは、はげ山がなぜ生まれたかということを、歴史・社会的背景から明らかにしようとした、初めての著書です。それまでにも、たとえばはげ山は土壌のせいであるといったことは明治時代から議論されていたのですが、それが人間の活動によって生まれたものだということを明らかにした初めての本なのです。逆に言うと、それまではげ山がなぜできたかということを真剣に考える人がいなかったわけです。

†資源の過剰利用により荒廃した地域

この本の中に、昭和二〇年代のはげ山の分布図が載っています（図65）。特に瀬戸内地方や奈良盆地周辺に多く分布していることが分かります。さらに、荒廃移行林、つまりはげ山寸前の林の図では、東北や北陸、九州などにも広がっており、かなり広い範囲で山が荒れていたことが分かります（図66）。

この本の中で特におもしろいのがまえがきです。「はじめはげ山を全く自然現象と考えていた」と書いてあります。今、近所にはげ山があったら、これは誰かが伐採したのだとすぐに連想すると思いますが、生まれた時からすでにはげ山があると、それは不自然とは考えられないわけです。さらに次の

図66　昭和20年代の荒廃移行林分布

図65　昭和20年代のはげ山の分布

ようなことも言っています。

よく日本民族は自然を愛するという人があるが、私がはげ山研究を通じて痛感したのはこの説がいかに実情を知らない人の言葉であるかということであった。

非常に痛烈なことを言っています。先ほどの伊豆の天城山系の例のように、政府や幕府、藩などによって厳しく管理されないと、山林はたやすく荒廃してしまう。実際、伊豆の天城以外の場所ははげ山に近い低植生地になっていたわけですから、このようなこととも関連しています。

†大きく姿を変えた里山

里山がブームになるのは、もちろんそれよりずっと後のことです。その時にはすでに、里山は大きく姿を変えていました。それは、まず燃料革命、肥料革命が起こるからです。燃料革命とは、もともと木炭や薪に頼っていた生活様式から、電気・ガスという化石燃料に置き換わっていったことを指します。また肥料革命とは、肥料が落ち葉や刈敷のような山林の資源から化学肥料に変わっていくことです。さらに、非常に安価な輸入木材が入ってきて、山自体に価値がなくなってしまいます。持っていても何も生み出さない山になってしまうと、放置されることになるので、植生遷移が進行する。すると、草原だった場所も、十何年か経って緑豊かな林になっていく。現在の里山は、このような状態です。

有岡利幸という林学者はおもしろい指摘をしています（『里山Ⅱ』）。

弥生時代に水田稲作農耕がはじまって以降、平成の現代ほど人里近い山地が樹木に覆い尽くされている時代はない。

里山がどのように姿を変えたかということは、図67で簡潔にまとめられています。左上に、「入会採草地」と書いてあります。江戸時代より前から共有で使っていた草地が入会地として維持されてきたわけですが、戦後になるとゴルフ場になったり、ニュータウンができたりして、開発の対象になっていく。一方、放っておかれた部分は、密生した樹林、森になります。つまり、草地が、現在は森か開発地域に変化しているわけです。

では、畑地や雑木林などが戦後どうなったかというと、やはり開発されるか、密な樹林になっている。つまり、いずれの場合も森になるか開発されるかのどちらかになって

しまったわけです。このように、里山が、戦後の何十年かの間に非常に大きく変容したということが、この図から分かります。

里山が荒廃していたということは、実は貧栄養地といって、これはこれで貴重な二次的環境です。つまり人が利用することで、環境が攪乱状態になる。そのような攪乱状態が生物多様性を維持してきたともいえるわけです。そのような多様な自然環境が、高度経済成長以後、植生遷移や松枯れによって、環境が単純化してしまいます。密な樹林か植林地ばかりになってしまい、環境が単純化することで、生物の多様性も徐々に失われているのが、ブームが起きたときの里山の姿だったのです。

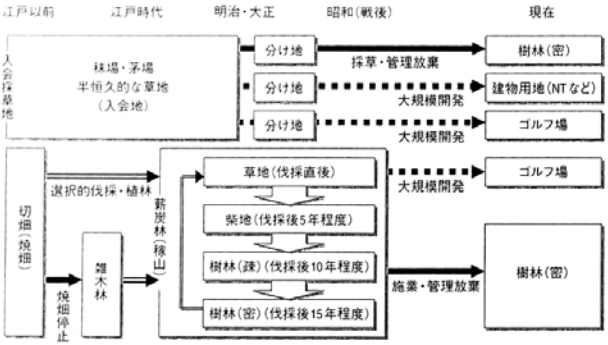

図67　里山の変容メカニズム／『里山の環境学』

静岡県には、絶滅危惧動植物をリストアップした『まもりたい静岡県の自然植物編』という本が出ています。この本によれば、たとえばアズマギクやマツバニンジンという草原性の植物、つまり草原がないと生きていけない植物は、図68・69のような分布になっています。いずれも○印がついていますが、これはここにいまあるのではなく、かつてあったという記録です。非常に草原的な低い植生が多かった伊豆半島には、かつてこれら

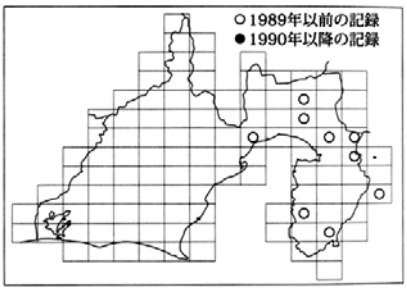

図68　アズマギクの分布記録

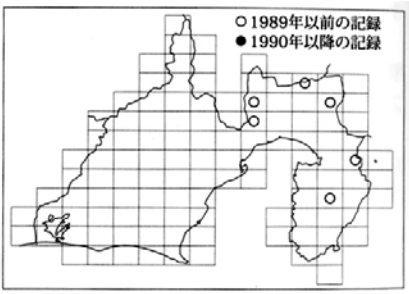

図69　マツバニンジンの分布記録

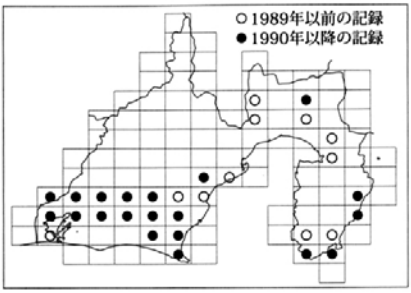

図70　キキョウの分布記録

の草原性の植物があったのですが、今はもうすでになくなっているわけです。

また、キキョウも草原性の植物ですが、静岡県内でも徐々に分布が減っていることが分かります（図70）。まだあるところにはありますが、伊豆半島では二ヶ所からすでに失われたということが分かります。

†新たに生み出された「里山イメージ」

このように、里山がブームになった時には、すでにその姿を大きく変えていたわけですが、そうすると、そこから里山のイメージがまた新たに生み出されることにもなります。

里山が理想的な場所だという言われ方をよくします。宇宙飛行士の毛利衛さんが「こういう里山はね、実は人が手をかけて守り育ててきた環境なんだよ。自然との共生っていうけど、昔から日本人はやっていたんだね」と言うテレビCMがありますが、この毛利さんのセリフは、まさにこの新しい「里山イメージ」を言い当てていると思います。

このCMでは、里山は人が守ってきた環境であり、さらに昔から自然と人間が里山という場で共生してきたということを言っています。また最近では、里山が再生可能な資源を生み出す場所であるとも言われます。このように、自然と人間が共生する姿と重ね合わせて、理想郷としての里山というイメージで語られます。

しかし、これまで述べてきたように、この理想と現実は、かなりかけ離れています。たとえば、緑豊かな田園風景が理想だとします。しかし現実には、高度経済成長以後のごく最近でき上がった姿です。また、持続可能な資源であると言われますが、実際には、長年にわたって資源が枯渇していたという記録が残っています。さらに、生物多様性の宝庫とも言われますが、現在の里山からは、すでにかなりの部分が失われつつあります。このように、現在の里山の実態とかけ離れた里山像が生み出されているわけです。

†里山ブームの功罪

このような里山ブームには、よい部分と悪い部分があるのではないかと思います。よい部分としては、「身近な自然」への関心が高まったことが挙げられます。これまでは自然というと、人が手をつけていない原生的な自然こそが大事と考えられがちでしたが、そうではなく、里山のような人が手をかけてきた二次的自然が注目され、そこに棲む生物の多様性、つまり数よりも種類の豊富さが大切であるという考え方が徐々に浸透しつつある。これは非常にいい面であると思います。

しかしその一方で、大切だと思うと、こんどは手をつけず「護って」しまおうとします。

草原や低植生地にさまざまな生き物が生きていたということは、そのような環境の方が適していたわけです。しかしそれを護ってしまうと、植生遷移が起きて、今度は森ばかりになってしまう。結果的に、そこにもともといた動植物は消えてしまうことになります。

里山に対する理解が得られてきているとはいえ、いまもまだ、一般的な自然保護の考え方として森への偏重という傾向があると思います。さらにその中では、巨樹・古木信仰といわれるものもあります。確かにそれらも大切ではある。しかしそこにばかり目を向けてしまうと、里山はまもれないということを理解する必要があります。

最近では、木を切ったり火入れをするといういわゆる里山的な管理が、非常に難しくなってきています。農業をしている知人がいるのですが、こんなことがあったそうです。サクラの木があって、その木が老木になったので若返らせるために切った。すると、通行人に「何でそんな大切な木を切るんだ」と怒られたというのです。もちろん、その所有者が切ることはまったく自由なことですし、むしろその木を生き永らえるために管理をしようとサクラの木を切ったわけです。実際にサクラの木の寿命はそんなに長くありません。ソメイヨシノなどは、せいぜい五〇年ぐらいですが、そのような管理をしてやることが、サクラにとってはむしろ大切です。またサクラは、暗い林では生きていけません。日が当たる場所でないとなかなか育たない。そのような植物ですから、切ってやるという管理は、むしろ適切です。ただ、一般的な認識として、木を切るということにはまだ抵抗があるのではないかと思います。

里山のこれから

†里山の単純化

では、里山はこれからいったいどうなっていくのでしょうか。少し予想をしてみると、水田があって畑があって、後は鬱蒼とした森という場所になってしまうのではないかと思います。

たとえば、伊豆ではかつて、畑がたくさんありましたし、草原のような場所も広がっていました。松も生えていたし、雑木林もあって植林地もありました。ところがその後、常緑樹林が育ち、草原や畑が雑木林になりました。戦後は植林地も増えました。ではこれからどうなっていくのか考えてみると、雑木林は植生遷移して常緑樹になっていくので、常緑樹林と植林地という非常に単純化された山林の姿が予

想されます。

†里山から消えていくもの

その時に里山からどのようなものが消えていくかと考えると、挙げたらきりがないのですが、まず松が減っていきます。白い砂と青々とした松によって形成される、日本の美しい海岸の風景のたとえとして、「白砂青松」という言葉がありますが、このような風景は減っていきます。全国的に広まっている松枯れ病の影響から松が減り、「青松」の風景も少なくなっていくと思いますし、「白砂」については、よく温暖化のせいで砂浜が減っているという指摘がありますが、私はそれだけではなく、山が崩れなくなったからだと考えています。つまり、砂を供給する源がもうないのです。昔ははげ山がありましたから、山から砂が流れていったわけです。それが今は供給されないので、砂浜はこれからも減っていくだろうと考えられます。だからといって、山を崩せばいいかのかというとそんな問題ではないので、非常に難しい問題を孕んでいると思います。

次に、秋の七草も消えていきます。秋の七草とは、ハギ、キキョウ、クズ、ナデシコ、オバナ（ススキ）、オミナエシ、フジバカマのことですが、いずれも草原の植物ばかりです。昔は身近なところに草原の植物がたくさん生えていました。ところが今は、植生遷移が進行することによって、そのような草原性の植物が減っています。明るい場所を好むツツジやサクラなども含め、今後は消えていくものと思われます。

このことは動物の世界にも波及します。カヤネズミはススキの生えているような草原に住んでいますが、草原がなくなるためにこのネズミが減る。またはノウサギが減る。そうすると猛禽類も減るわけです。

よくオオタカがいる森を守ろうと言われることがあります。確かにそれは重要ですが、森を守っただけでは、オオタカを守ることはできません。オオタカが狩りをする時、見晴らしがよくないと獲物は獲れないのです。つまり、そのような開けた環境があったからこそ、猛禽類も生きられる。ですから、森を守っているだけでは猛禽類は守りきれません。

それから、草原には虫がたくさんいます。しかし、特に明るい草原を好む陽地性昆虫は減っていきます。実際、伊豆半島で記録された蝶で、今はもう見られないというものが何種類かあるようです。

†里山に増えていくもの

逆に、何が増えるかというと、まず人を寄せつけない暗

い森が増加していきます。カブトムシが採れるような明るい雑木林は減っていき、常緑樹が生い茂る暗い森が増えていくだろうと思います。さらには、森林性・南方系の動植物の増加も指摘されています。

私がフィールドにしている東京都の多摩市で、タシロランという腐生植物が見つかりました。腐生植物とは、腐葉土から栄養を得るタイプの植物で、緑色をしていません。タシロランは絶滅危惧種なのですが、調べてみると今どんどん増えていることが分かりました。昔は四国・九州にしか分布がなかったのですが、今は群馬県辺りまで広がっています。近ごろよく温暖化が問題にされますが、タシロランの増加については、温暖化よりも、雑木林に落ち葉が堆積していることがその要因の一つではないかと考えています。これも山林を利用しなくなった結果、増えてきたと考えられます。

さらに最近は、クマに襲われたというニュースをよく聞きます。あるいは、血を吸うヤマビルが増えているともいわれていますが、これらも里山が管理されなくなったことが影響していると指摘する人もいます。

というのも、以前に比べて人里近くまで森林が迫ってきているということは、逆に動物側から見ると、自分が生活している範囲を少し出ると、もう人がいるわけです。昔は里山という開けた環境があったので、そこには森林性の動物が近寄りませんでした。ところが今は、そのような動物がたやすく人里近くまで来てしまう環境があるのです。動物と人間が直接接しない環境のことを、緩衝地帯（バッファゾーン）といいますが、この緩衝地帯がなくなったことによって、森林と人里が接近しすぎているのだと指摘されています。

†山林利用のこれから

利用されることがほとんどなくなってしまった山林資源に、最近注目が集まりつつあります。その一例をご紹介したいと思います。

近年、CO_2が増えているという話がよく言われますが、なぜ増えるかというと、植物を切るからではありません。化石燃料を使うからです。もともと大気中にあるCO_2を植物や海水が吸収し、また植物から出るという循環があるところに、化石燃料を投入したために、全体のCO_2が増えているのです。

ですから、木を植えたらCO_2が減るというのは、実は大きな間違いです。植物も生き物ですから、CO_2を出しています。また枯れた樹木や落ち葉などからCO_2が発生します。植物は、一時的に蓄えることはできるけれども、CO_2を減

らすことはできないわけです。では、CO_2の排出を減らすにはどうしたらいいかというと、植物を化石燃料の代わりに使うことが考えられています。

たとえば、雑草からエタノールを作るという試みがあります。最近ではトウモロコシからエタノールを作って食料問題になっていますが、食料とは関係のないススキからでも、かなり効率よくエタノールが取れるという研究があります。また、樹木を発電に使うという研究をしている人もいます。このように、ある意味では昔のように、里山の植物をエネルギーとして使うという研究が、最近になって活発になっています。

質疑応答

質問――私は香貫山のすぐ近くに住んでいます。私の家は、代々百姓でした。昔は「イリモヤケン」という木札を持って、松葉をかきに山に入りました。その松葉や落葉樹の枯れ草を利用して、畑の堆肥を作りました。そのような関係で、イリモヤケンの許可証がないと、山に入れない状態でした。そのような木札の焼印の判は、今、民俗資料館に寄贈して、保存していただいています。

毎日、私の家から香貫山を見ています。すると、昨日枯れていなかった木が、今日は赤く枯れているということがよくあります。現在の香貫山は、専門家から見て、山の荒れ具合はどうなのでしょうか。もし山が荒れている状態でしたら、地元の一員として、沼津市に何らかの対応をお願いしたいと思うのですが。

富田――地元の方から興味深いお話をいただきました。おそらく枯れているというのは松だと思います。最近は松枯れ病の影響で、松は壊滅的です。また、この香貫山に私が実際に入って感じた印象は、やはり下草が多いということです。

それが荒れているかどうかということですが、これは一概には言えません。たとえば、植生が貧弱かどうかということでいうと、昔の方が資源を利用していたわけですから、昔の方が荒れているという言い方ができます。逆に今は、管理をしないことで荒れているという言い方ができます。今の方が原生的な自然が戻ってきているという言い方もできるわけです。結局は、どこに軸足を置くかという問題になってくると思います。

そのためには、実際に山に触れることの多い地元の方々が話し合い、いろいろな案を出し合って、今後どのような方向に山林を管理していくかということを考えていくことが必要なのではないかと思います。

参考文献

山梨県『富士山の自然界』一九二五年
萱沼秀雄『ふるさとの思い出写真集　富士吉田』国書刊行会、一九八〇年
小椋純一『植生からよむ日本人のくらし』雄山閣、一九九六年
沼津市明治資料館『レンズに写った沼津』一九九六年
佐藤和三『写真風土誌　伊豆』大日本印刷、一九六八年
永岡修『目でみる西伊豆の歴史』緑星社、一九八六年
岩波書店『静岡県』岩波写真文庫新風土記24、一九五八年
竹田信一・杉山紀元『目でみる伊東市の歴史』緑星社、一九八〇年
芹沢栄一・渡辺好洋（監修）『写真集　御殿場・裾野いまむかし』静岡郷土出版社、一九八九年
矢野悟道（編）『日本の植生』東海大学出版会、一九九四年
岩波書店『滋賀県』岩波写真文庫新風土記27、一九五五年
酒井直行・本多秀臣・聴涛真悠子（編）『鉄道古写真』新人物往来社、二〇〇七年
岩波書店『香川県』岩波写真文庫新風土記39、一九五六年
森下義郎・大山浪雄『緑化促進によるハゲ山の早期復旧』林業試験場研究報告第99号別冊、一九五七年
岩波書店『岐阜県』岩波写真文庫新風土記23、一九五七年
千葉徳爾『はげ山の研究』農林協会、一九五六年
有岡利幸『里山Ⅱ』ものと人間の文化史118-Ⅱ、法政大学出版局、二〇〇四年
武内和彦・鷲谷いづみ・恒川篤史（編）『里山の環境学』東京大学出版会、二〇〇一年
静岡県環境森林部自然保護室『まもりたい静岡県の自然　植物編』羽衣出版、二〇〇四年